

解説

1 『東海道四谷怪談』ってどんな作品？

日本でもっとも有名な幽霊はおそらく「四谷怪談」のお岩様でしょう。皆さんも一度はお岩様の名前を耳にしたことがあるかと思いますが、いったいどんな幽霊か説明することができませんか。お皿を数える幽霊？ いいえ、それは「皿屋敷」のお菊様です。片目の腫れ上がった醜い容貌になり、夫の裏切りを知って恨み死にする女性、それがお岩様です。東京都新宿区の四谷に「於岩稲荷」が祀られているように、この怪談には実説として伝えられているものがありますが、今日の我々が知る物語の大部分は、文政八年（一八二五）七月、江戸の中村座で初演された歌舞伎『東海道四谷怪談』において、作者の四代目鶴屋南北が創作したものに基づいています。全五幕から成るこの作品、お岩様が悲しき変貌を遂げるのが二幕目の「雑司ヶ谷四ツ谷町の場」で、掲出したのはその続き、三幕目「砂村隠亡堀の場」の終盤、物語が一番の盛り上がりを見せる場面です。

さて、本文の注を読んでみて、この作品がいわゆる「忠臣蔵」の話を背景にしていることに気がついたでしょうか？ 決まって年末にTVで放映されるあの時代劇ですね。歴史的には「元禄赤穂事件」と言い、元禄十五年（一七〇二）十二月、大石内蔵助以下四十七名の旧赤穂藩士が、主君浅野内匠頭の仇を報じるため吉良上野介を討つという事件が起こりました。多くの脚色作が生まれましたが、中でも寛延元年（一七四八）八月、大坂の竹本座で初演された人形浄瑠璃

がどういった動きをするのか、台本の記載に基づきながら実際の舞台面を頭に思い浮かべてみることで、『四谷怪談』は今日もしばしば上演される人気作ですから、もちろん現行の舞台がある程度は参考になります。ただし、例えば近代の大道具（↓参考資料1）と初演時の台本の指定（↓参考資料2）とに共通性はあるものの、そもそも舞台のサイズに大きな違いがあるように、それは江戸時代そのままという訳ではありません。

江戸の人々が観ていた舞台が果たしてどのようなものであったか、それを知る手掛かりとなるのが台本以外の周辺資料です。皆さんは映画や演劇を観に行ったとき、記念にプログラムを買いませんか？ 江戸時代の歌舞伎でも絵本番付と呼ばれる、各幕の主要な場面を絵で示した小冊子が発行されました（↓参考資料3・QP28課題四）。また、今日のポスターに類する辻番付という刷り物も貼り出されます。歌舞伎役者は庶民にとっての憧れのスターですから、今のブロマイドのように役者を描いた浮世絵が演目毎に売り出されました。当時の役者の風貌がわかるとともに、衣裳の様子を窺うことができます。台本の理解を視覚的に助けてくれるのが、こうした絵画資料なのです。

3 江戸版メディアミックス

本文の一番の眼目は、三代目尾上菊五郎がお岩様と小仏小平を早替りで演じる、「戸板返し」の趣向です。浮世絵の中には仕掛け絵と言って、この趣向の再現を試みたものもあります（↓参考資料

『仮名手本忠臣蔵』がその決定版となったので、この事件の通称を「忠臣蔵」と言うようになりました。ここで注意しておきたいのは、当時は実際に起こった事件を実名そのままに脚色すると幕府のお咎めがあったということです。そこで作者はこの事件を室町時代の出来事として置き換え、内匠頭を塩冶判官、上野介を高師直という『太平記』の登場人物に仮託しました。討ち入りのリーダー内蔵助も、実名をもじった大星由良助という架空の名になります。『東海道四谷怪談』にも佐藤与茂七や小汐田又之丞といった義士が登場しますが、実名通りでないのはこうした訳があるからです。

本作は初演時には「仮名手本忠臣蔵」とセットにして上演され、『忠臣蔵』の外伝としての枠組みが採られました。お岩様の夫伊右衛門も塩冶家の元家来という設定ですが、主家への忠義はどこ吹く風、討ち入りの計画に参加せず、あまつさえ敵師直の家来伊藤喜兵衛に婿入りしようとする不義士として描かれます。江戸時代も後期を迎え、かつては賞賛された武士の忠義も、現実の社会では顧みられなくなっています。作者南北はそうした世相を鋭く捉え、自身の欲望に忠実な等身大の武士の姿を伊右衛門に投影させたのです。

2 江戸の舞台を想像する

セリフと書きから成る歌舞伎の台本は、舞台上の上演を前提として作られるものであり、読み物として読むことを目的としたものではありません。したがって、読みこなすにはそれなりのコツが必要です。ト書きに記される多くの専門用語を正しく理解するのは言うまでもありませんが、その上で大切なのは、どのような演出のもとで役者

4・QP28課題五。歌舞伎は当時の第一級のエンターテイメントです。年代記や役者の名鑑、楽屋裏の解説書など、ありとあらゆる関連書籍が作られました。参考資料5の『御狂言楽屋本説』二編上（二代目三亭春馬著、一蘭斎国綱画、安政六年（一八五九）刊）では、この早替りのトリックを知りたい読者のために、その秘密が明かされています（QP28課題六）。

現在、人気のあるTVドラマはノベライズ版が出版されることがありますが、江戸時代の歌舞伎でも同様のことが行われました。絵の周りにセリフや地の文を配した草双紙と総称される文学ジャンルは今日のマンガの原点にも擬されます。近世中期に起こり、赤本から黒本・青本、黄表紙・合巻へと発展を遂げますが、この合巻の体裁を借りて、後期には正本写と呼ばれるものが生まれます。「正本」とは歌舞伎の台本のこと、つまり歌舞伎の紙上演です。登場人物の顔は役者の似顔で描かれ、庶民はこれを通じて家に居ながらにして舞台を追体験しました。『四谷怪談』初演の翌年文政九年には早速正本写の『東街通中四ツ家怪談』（尾上梅幸作・花笠文京代作・深齋英泉画）が刊行されます（↓参考資料6・QP28課題七）が、さらにその次の年には後編として『四ツ家怪談後日譚』が出版されます。この後編、内容は『四谷怪談』の続編ですが、実は歌舞伎での上演に基づいたものではありません。つまり、異なるメディアで独自の展開が遂げられているのです。江戸の歌舞伎文化、意外と現代のエンターテイメントに近いと思いませんか？